
秒針のない時計

秋島キサト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秒針のない時計

【Nコード】

N6987B

【作者名】

秋島キサト

【あらすじ】

僕にはただ一人、親友がいた。彼の名前は悠太。中三の夏の日、蒸し暑い僕の部屋で、僕らが交わした言葉の断片。

大概のことなら上手く出来た。それは全てが飛び抜けて優れているというのではなく、へこみのない平坦な道ということだ。勉強普通運動普通目立たず騒がず平凡代表。子供にとつて浮くか浮かないかの重要なポイントであるこの三点、僕は難なく満たしていた。もちろん何か特技が欲しいとか、そんな贅沢なことを思う時もある。だけど僕は至極謙虚だ。至つて謙虚だ。下手な高望みは身を滅ぼす。いつそう考え始めたのかは知らないけれど、そうであることを美德とした。

そんな人間だ、さぞかし交友関係は広く浅いのだろうと思われたかもしれない。確かに。近頃そんな人が増えているようだし、そんな虚しいティーンエイジャーを主人公にした物語も、巷に溢れかえっている。だが僕は違った。僕には、心から信頼出来る親友が、たった一人いた。そいつとは幼馴染みでも何でも無い。中学に入ってから一ヶ月くらいしてから、何でか意気投合した。理由ははっきりとは分からない。ただ、掃除場所が一緒だったとか、そんなことがきっかけだった気がする。

そいつの名前は悠太。悠太だ。

「なあ、お前、好きな子とか、いないの」

中三の夏休み。僕の部屋で勉強をしていた悠太が、何の前触れもなくそんなことを言った。

僕の部屋は、一軒家の二階、南側だ。申し訳程度の日除けはあるものの、夏は四角い窓からダイレクトに日差しが入ってきて、文句なしに熱い。そのくせドアを閉めれば風も全く通らないから、木製のベッドにかびが生えるほど湿度が高い。簡単に言えば、不快指数が高かった。その上、当時の我が家にはクーラーが一台しかなくて、それはもちろん僕の部屋にはなかった。扇風機で我慢しろと、母は

常日頃そう言っていた。

そんな狭い部屋に、何が悲しくてたくましく成長した中三男子二人、と思うだろうか。でも僕らは、夏でも冬でも、いつもここで遊ぶのだ。

「……なんだよいきなり」

「いいじゃん別に」

「いないよ。そんな浮かれたこと言ってられるか受験生」

僕がそう言って、赤ペンだらけの数学の問題集をとんとんと叩くと、彼は全くだ、と並びの悪い歯を見せて笑った。

もう勉強に飽きたのか、四角いミニテーブルの向かいにあぐらを掻いた彼は、シャープペンを白いノートの上に転がした。またか、と僕が思っていると、案の定、彼は背後に設備されている低い棚をあさり出す。毎度お決まりのパターンだ、彼は僕の部屋に来ると必ずそれをした。

その棚は特に綺麗に整頓されたわけでもなく、読まない文庫本とか、鉛筆立てとか、何となく捨てられずにいる怪獣のおもちゃとか、適当に投げ込まれているだけだった。大体の大人は、これを見れば顔をしかめるだろう。しかし悠太は、そんな雑然とした棚を、いつも物珍しげにあさっていた。

「いいなあ、お前んちには色々あって」

それが彼の口癖だった。

僕はそれを聞くと、何と言っているかわからない。僕は知っていたのだ。彼の家は母子家庭で、僕の家とは比べものにならないくらい貧しいのだということを。彼から見れば、がらくたの詰まった棚だって宝の山なのだ。僕は黙って、テーブルの上で汗をかき始めたガラスの表面を指で拭いた。

悠太の一番のお気に入り、時計だった。秒針のない、時計。

どこで手に入れたのかは僕にもよく分からない。気付いたらがらくたの中に紛れていた。丸い、荒削りな木に、プラスチックの盤面がはめ込まれた、無骨な一品。電池は入っていて、ちゃんと動いて

いる。拳くらいの大きさのそれを、悠太はその時も、持ち上げ持ち下げ眺め回していた。僕に背を向けて、その表情は分からない。僕はただ、無邪気な好奇心に呆れ半分、羨み半分でそれを眺めていた。「俺さあ、一組の中野が好きなんだよね」

突然、見慣れた動きを見せながら、悠太は初めて聞くことを言った。

「へえ」

僕は多少驚いたが、その中野という女子がどんな奴か知らなかったので、さほど反応を示せなかった。それよりも、なぜ時計を眺めながらそんなことを言うのか、疑問に思った。

悠太は明るい口調で続ける。

「知らないか。かわいいんだぜ、あいつ。大人しいんだけどさ、やることはちゃんとやって、でもちよつとドジなの。控えめに笑うところが、好きだな」「ふうん」

「でも、駄目だよな。俺みたいな貧乏人と付き合う奴なんて、どこにもいねえって」

照らされた表面の下に、黒が見えた。

「駄目だよ。俺、貧乏だし、かつこよくねえもん。あんなかわいい子と、釣り合うわけねえよ。知ってるんだ。あいつ、結構もてる。俺のことなんか、眼中にないよ」

語尾が震えたので、僕は振り向かせることが出来なかった。

誰が、「そんなことない」と、軽々しく言えただろう。

悠太は時計を動かすのをやめて、膝の上に置いていた。拳で目元を拭うことはなかったけれど、時計ではなく、天井を見て、必死に堪えているみたいだった。

僕は本当は、その時何と言つべきだったのだろう。しかし今でも、それが最善の言葉のように思える。

「悠太」

「……ん」

「その時計、やる」

「え？」

悠太は信じられない速さで振り返った。思った通り、目は赤く、浅黒い頬に一筋涙のあとが見えたが、本人はそれどころじゃないらしい。僕はその様に、笑いをかみ殺しきれなかった。

「いいのか？」

「いいよ。好きなんだろう？それ」

「そりゃあそうだけど」

「ならいいよ。大切にしろよ」

悠太の丸い目が、さらに大きく見開かれる。それから、ちょっと俯いて、じっと時計を見つめ、そして、並びの悪い歯を見せて笑った。

「ありがとう」

僕も笑った。悠太の涙を指差して、必死に弁解する彼を笑い飛ばして、二人して勉強もしないで笑い転げていた。

それが、悠太に会った最後の日だった。

その後の夏休み中、僕は何度か悠太の家に行ってみた。彼の家には電話がないからだ。しかし、その古い家に行ったとき、玄関前の自転車はなく、雨戸も閉め切られていた。田舎に帰っているのかもしれない、と僕は自分をごまかしてみたが、その可能性は限りなく低いことを知っていた。そして、彼にはもう二度と会えないだろうと悟った。

二学期の初め、先生は暗い面持ちで、悠太が転校したことをクラスに告げた。だが、それを信じている生徒は一人もいなかった。夜逃げしたのだ。そんな噂が、あちこちで囁かれた。僕もそう思う。不思議とすんなりその推測を受け入れることが出来た。僕は泣かなかった。それは、悠太があの時計を持っていてくれていると、そう確信していたからかもしれない。

あの日、悠太がうちを去るとき、僕は彼に訊いてみた。なぜその時計が好きなのか、と。すると、彼は齒を見せて笑い、こう答えた。「秒針がない時計ってさ、いきなり長針が一気に動くだろ。俺達は最初どきってするけど、後でああ、何にもおかしくないや、って思う。その感覚が、不思議で、好きなんだ」

（後書き）

相当お久し振りです。連載途中の小説が二つあるにもかかわらず、短編失礼します。正直、連載中の二つは削除したい気持ちです。あまりにもまとまりがなくて目も当てられないです。ちゃんと話がまとめられたらまた書き直したいと思います。

さて、この話は突発でどこまで書けるかということを試した習作です。感想・批判、今後の参考にしたいと思いますので遠慮せず言いつけてやってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6987b/>

秒針のない時計

2010年10月8日15時52分発行